

# 文レベルの[主—述]構造による結合体と「述部内容」の融合体 —日本語文構造における表出段階・認定段階・提示段階

于 日 平

朝日大学 経営学部

## The Fusion of [Subject-Predicate] Structure and [Statement] at the Sentential Level—the Declarative Modality, Judgmental Modality and Expressive Modality in Japanese Sentence

Yu Riping

*Asahi University Faculty of Business Administration*

### 要 旨

文に対する定義は次の2点で意見の一致が見られていると言えよう。1) コミュニケーションの基本的単位であり、構造的にも意味的にも完結体をなしていること、2) 文は表出内容の「命題」と話し手の心的態度の「モダリティ」という二つの部分から構成されていること、と。<sup>1</sup>しかし、具体的に日本語文において「命題」と「モダリティ」はそれぞれがどのように形作られ、両者がどのように結合されていくのか、それは文レベルにおいて、意味伝達のために用いられる[主—述]構造とどのように関わっているのかについては、解釈が大きく分かれている。

言語活動は、話し手が記号を使って能動的に意味表出を行う主観的で創造的な活動である以上、文レベルにおいて構造的に「何について述べるか」と「どのように述べるか」という分け方には、すでに話し手の表出意図が含まれていると考える。本研究では、日本語文を対象に、具体的に[文内容・モダリティ]の結合・融合の仕方を三段階に分けることにする。第一段階＝[主—述]構造によって表される「命題」で、その結合体に話し手の表出意図が示されている；第二段階＝「述部の実質的内容に対する話し手の認定」を示すもので、「対事的モダリティ」を表す；第三段階＝話し手が「対事的モダリティを含む述部内容」を相手—聞き手または読み手—に差し出す心的態度を示すもので、「対人的モダリティ」を表す。このように「対事的モダリティ」も「対人的モダリティ」も「述部内容」を特徴づけるもので、[主—述]文構造に

<sup>1</sup> 文の二つの構成部分に対して、学説によって様々な術語が使われていて、多少の相違がある。本研究では、中国語との比較を考慮して「命題」と「モダリティ」—中国語研究では「命題」と「語気」と呼んでいるが—を使うことにする。しかし、後で展開する議論を見て分かるように、従来の研究の中で言う「命題」とは、それが指し示す範囲が必ずしも明確に示されているわけではなく、さらに[主部]を除いた[述部]だけを指すという解釈もあるように思われる。従って、本研究では、文は[主—述]結合によって作られるものという立場に立つので、ここでの「命題」は「述べられ対象」と「述べの内容」の両方を含める文内容全体を指すというふうに解釈する。

において「主部内容」と結合して意味表出的に一体化するのである。

キーワード 文の形式完結性と意味まとまり性 〔主一述〕構造による「命題」結合体  
日本語文の二重〔主一述〕構造 「述部内容とモダリティ」融合の階層性 情報学と言語学のインターアクション

## はじめに

文はコミュニケーションの基本的単位で、構造的には完結体になっており、意味伝達にはまとまった意味を表出していると言われている。そして、その構造の完結性と意味のまとまり性に対して、文は「命題とモダリティ」の二つの部分から構成されていると定義されている。<sup>2</sup>これは基本的に正しいと見てよかろう。これまで具体的に日本語文の構造上の完結性と意味伝達上のまとまり性に対しては、様々な角度から分析が行われていて、多くの解釈法が現れている。しかし、これまでの研究では、一般言語学上の基本的原則と日本語の文構造上の特殊性を対立させる議論が多いため、総合的に日本語文の形式構造と意味機能の関係を合理的に解釈ができていないように思う。問題の核心は、単に漠然と「命題」と「モダリティ」の存在を認めるのではなく、具体的に日本語文を分析するにあたり「どこからどこまでは命題の範囲で、「命題とモダリティ」はどのように結合しているのか」を合理的に説明できるというところにある。

本文では、まず現代の日本語文研究において代表的と認められる二つの説を紹介し、それを踏まえたうえで、「命題」とは、文レベルにおいて〔主一述〕構造によって完成される文の表出内容であると再定義し、文構造において「文の表出内容」と「モダリティ」は階層的に形成されていく拡張的結合体であり、話し手がする表出・認知・提示に従って三段階に融合されていくものと主張する。そして、日本語文では、その三段階の結合・融合過程においては、次のような特殊性が表れていると考える。A) 表出段階では、日本語文に見られる二重〔主一述〕構造を特徴とし、文レベルの{〔主語が一述語〕 ⇔ [主題は一述題]} 対立は「二分結合法」表出の特殊なタイプである。[主題は一述題]は情報学的に言えば、「既知→未知」による解説型表出であり、[主語が一述語]は、「未知←既知」による照合型表出と[未知—未知]による情報提供型表出である。B) 文レベルの〔主一述〕構造を基にして、段階二の「認知モダリティ」は「述部の実質的内容」につく「対事的モダリティ」で、表出される文の表出内容に対する話し手の認定を表し、段階三の「提出モダリティ」は対事的モダリティを含む述部内容につく「対

<sup>2</sup> 文の構造と意味伝達の完結性は、言語活動において文が独立した基本的単位として保証するものである。橋本進吉氏は、その構造と意味伝達の完結性を外形上特徴付けるものとして、「1) 文は音の連続である、2) 文の前後には必ず音の切れ目がある、3) 文の終には特殊な音調が加わる。」と説明している（『言語単位』『国文法体系論』p.54）。また、時枝誠記氏は、日本語文の特徴として「助詞・助動詞によって統一、完結されるもの、零記号の助詞・助動詞によって統一、完結されるもの」と解釈している（『文論』『日本文法 文語編』p.279）。これらの代表的な文説明を見て分かるように文定義は主に構造と意味の両角度から行われるものが多い。

人的モダリティ」で、主に相手—聞き手や読み手—に対して、話し手の態度主張を表すことになる。

このように、文は人間が世界の出来事を私なりに捉えて言語化するものである以上、「主部」と「述部」に分けることから、すでに主体的な作用を始めており、それが日本語文構造において、さらに「述部」につく第二段階と第三段階のモダリティと様々な形で融合し、それによっていろいろな言語表現形式が生み出されていくのである。

## 1、日本語文に関する構造と意味機能の代表的な先行研究

日本語文に対する構文的研究の多くは、文の基本的構造と「命題・モダリティ」の結合法という二つの要点に集中しているように思い、代表的な議論の相違は主に次の三点にまとめることができよう。A)「述語中心」の構文論研究と[主—述]構造の構文論研究；B)「モダリティ」は文末に付くので、述部内容だけに関わるものか、それとも[主—述]構造による表出内容のすべてを含めるものか；C) 構文にあるモダリティは「対事的」と「対人的」の二段階階層か、それとも[主—述]構造を基本とする表出・認定・提示という三段階階層か、ということである。

### 1. 1. 「述語中心説」に関する代表的学説<sup>3</sup>

日本語文の構文的研究にある「述語中心説」は、日本語文の特殊性を根拠に提起されたもので、その主な論点は次のようにまとめることができると思う。A) 日本語文の「命題」部分は主に「述語」を中心にして構成されるもので、鏡状を呈する格関係が構造的特徴とされる。B) 述語につく「モダリティ」は「命題」の外側にあり、「命題」内容を包み込む形で文が形成される。C) 文構造の完結性と意味表出のまとまり性は文末に付く「純モダリティ形式」によって示される。D) 日本語文の基本的構造は[主題は—述語]であり、同じく[主—述]構造の[主語が—述語]は格構造の中の一つにすぎない。E) 日本語文構造に「無主題文」が多いのは、「述語中心」という構造的特徴に関係があり、それは情報伝達上の[既知—未知]に密接に関わっている。<sup>4</sup>「述語中心説」は長い間に日本語の構文的研究で盛んに行われているもので、日本語文の構造上と使用上の特殊性を正しく指摘しているところが多い。しかし、文レベルか

<sup>3</sup> 日本語文に「主語」があるかないかについては、構文研究のホットテーマとして長い間さまざまな角度から検討されており、『日本語文法事典』(2014)では、「主語賛成論」「主語廃止論」「用法ごとに認定する中間論」と大きく分けて、概略的にその三つの説を紹介している。そして、その中の一つは「日本語に主語がないという主張は、主語を専ら統語上の概念だと決めてかかる観点に立つものである (p.267)」とある。構文的には西洋語でいう「主語」たるものが表れないのだから、それで、日本語文をありのままの姿で分析するのなら「述語中心」に文が形成されるという解釈だと理解する。

主語廃止論に対して、野田尚史は「主語賛成論」を四つの流派に分けて紹介解説した。本研究は、日本語文の主語に関する史的研究ではなく、また、それに関係のある学説を全面的に取り上げることはしない。主に本研究で問題にする日本語構文特徴を中心にして、【主題は～述語】と【主語が～述語】という構文式で、両者の機能対立を分析して行きたい。

<sup>4</sup> 「は」の用法については、日本語の構文的研究において長い歴史があり、さまざまな角度から盛んに研究されてきている。「は」は格助詞ではなく、格関係を超越した関係を作り出すもの、などの点に対しては多くの研究者が認めている。

ら〔主―述〕という基本的な結合構造を追い出してしまったため、「命題」範囲に対する認定だけでなく、「文の表出内容とモダリティ」の関係の仕方、さらに日本語文の構造と機能の関係などに対して、未だに合理的に解釈できていない。<sup>5</sup>

「述語中心説」には構文解釈として次のように理解が誤ったり不十分だったりする認識があるのではないかと指摘できよう。一つは、一般言語学に基づく〔主―述〕構造の機能に対する理解で、もう一つは、意味伝達に関する一般則と日本語文の特殊性に対する理解だと考える。具体的には「述語中心説」主張の主な欠点は次のようにまとめられよう。A) 〔主―述〕構造は人間が言語を使って表出内容を作り出す時に用いられる最も基本的な構造であり、それには「文レベルのもの」と「文レベル以下のもの」と区別されるべき二つがあること、B) 日本語文レベルでは、構文的に〔主語が―述語〕と〔主題は―述題〕の対立した二つの構文式があり、それぞれが異なった構文的機能を果たしていること、C) それに関連して、「無主題文」の特殊性や、「モダリティ」が述部につくという構造上の特殊性を過大評価し、「命題・モダリティ」を「述部内容」に限定して議論をしがちになること、D) 文形成過程において、話し手が行う心的作用は結合と融合の二種があり、それが互いに作用しあって文が最終的に形作られていくこと等、ということである。従って、このような研究分析は日本語表現の特殊性を明らかにすることができても、普遍性と特殊性を総合的に分析したうえで、日本語そのものを解明することができないのではないかと考える。

文レベルにおける〔主語が―述語〕と〔主題は―述題〕の対立<sup>6</sup>が次のように機能的に対立している。

①雨が降っている。↔ 雨は降っている。

②これが最近出版された日本語教科書です。↔ これは最近出版された日本語教科書です。

文レベルにおいては、〔主語が―述語〕は主に、両者を結合して全体でまとまった一つの出来事などを表すことと、述部が既知を示す場合には「主語」を情報照合の焦点にして行うこと、という機能を果たし、〔主題は―述題〕は主に、話題として取り上げられる内容―既知になる場合が多いが―を主題に立てて、それに対して判定なり解説なりを行うという機能を果たす。それについては、すでに多くの研究があり、それぞれの具体的な用法が詳細にわたって明らかにされている。だが、「述語中心説」に従えば、構文レベルの意味表出が対立構造をなしていると認めにくいように思われる。その結果、実際の日本語文章を構文的に解釈する場合、各日本語文に対する機能説明と文と文の関係解説は非常に不便になってしまう。

③a) 私のまえを、年わかいお母さんに手を引かれて、白いセーターを着た四つぐらいの女の子が歩いている。歩いているよりは走っている。お母さんは家においてきた赤ちゃんのことで

<sup>5</sup> 「述語中心説」の流れについては、歴史的にもいろいろな先行研究に関わっており、現代の日本語の構文研究においても外国の研究成果を取り入れたりして行われるものも多い。あえて影響が大きい先行研究といえば、時枝誠記氏の「入れ子型構文」理論と三上章氏の「主語抹殺論」などが取り上げられよう。

<sup>6</sup> 二つの部分を「述べられ」と「述べ」に名づけるのは意味機能を重視する言い方で、「主語」と「述語」に名づけるのは言語構造を重視する言い方と理解する。ここでは、日本語文を中心に分析するので、文レベルの機能役割分担を明確にするために〔主題は―述題〕と〔主語が―述語〕と呼ぶことにする。

も気になるのであろう、夕方の道をひどく急いでいる。手を引かれている女の子は、そのために絶えず走り続けなくてはならない。

「b) えいちゃんが走ると、お人形さんが泣くよ。」とその子が言う。

見ると、女の子の右わきからは、きれいで作った人形の足が二本、うしろに突き出ている。その先には、赤いくつ下がはかせてある。c) 女の子が走るにつれて、人形がピーピーと声を立てている。 (西尾実『日本人の言葉』による)

例③に使われる〔主語が—述語〕構造のa)とb)は、全体がまとまった内容を表すものとなり、特にb)の中の「お人形さんが泣くよ」は全体が母親に対して注意を喚起しようという内容として強調されているのである。<sup>7</sup> このように文レベルにおいて〔主語が—述語〕と〔主題は—述語〕の対立を認めないのでは、話し手がなぜこのように異なる文構造をかわるがわるに用いて表現していくのかが理解できなくなるだろう。

日本語文を分析する時に生じたこのような不都合は、一般言語学の普遍性と日本語の特殊性の関係や、意味伝達の一般則と日本語の表現的特徴の関係に対して、特殊性をあまりにも重視しすぎたために、普遍性や一般則が無関心になってしまうことになったというところに原因があるのではないかと思う。

## 1. 2. [主—述] 組み合わせ構造に関する代表的学説

奥田靖雄氏(1985)では、言語表現の普遍性から出発して、文とは、人や主体と動作や性格、性質、状態などを二つの部分に分けてから結び付ける表現構造物であると述べ、「このことは最も単純な形態においては、主語と述語を結び付けるということで実現する。」(文のこと p.239) そのため、奥田氏は「主」を「述べられ」と、「述」を「述べ」と名づけ、このように、話し手が発話の目的に応じて伝えなければならないことを言語的に〔主—述〕に分けてから取り結んで文の中に作り出しているのだと解釈している。<sup>8</sup> 鈴木重幸氏(1992)では、奥田氏の理論をさらに次のように説明している。話し手が「述べられ」を〔主〕として取り上げて「述べ」を行う時に、「対象的な内容—本研究で言う「命題」の概念にほぼ当る(筆者注) —が、話し手の<私>にとって、何であるか、ということが、その対象的な内容につねにつきまとい、それが文の文法的なかたちのなかに、主として述語の位置に現れてくる単語の形態論的なかたちのなかに、表現されて、さまざまな文のモーダルな意味をなしている。」と。  
(〔主語論をめぐって p.95])

〔主—述〕構造や文の定義に対する奥田氏と鈴木氏の解説はいずれも、言語表現に対する一般言語学理論から出発し、コミュニケーションの基本的単位である文とは、基本的にどんな構

<sup>7</sup> 「全体描写」か「主語に対する照合的強調」かの機能相違は文脈によって決まる。これについては、次回の記事に譲る。

<sup>8</sup> 尾上圭介氏は日本語の〔主題は—述語〕構造を、同じく「二つに分けてから一つに取り結ぶもの」と説明を行っているが、言語表現は〔主—述〕構造を基本として内容が形作られることについては述べておらず、文レベルにおいて〔主題は—述語〕構造と〔主語が—述語〕構造が機能対立をしているについても触れていないように見受けられる。詳しくは参考文献に参照。

造を有し、なぜそうなるのかという普遍性を解説したもので、それが日本語文の構造と機能を一般性と特殊性の総合的視点から把握するうえで出発点となり得るところが多いと思う。しかし、〔主―述〕構造は言語表現内容を形作る基本的構造であるというだけで、文レベルと文以下レベルとの相違を明確に区別しないと、日本語文構造を階層的に解明することができないだろう。また、日本語文は、述語が文末に置かれること、形態的にモダリティを示す言語形式が文末一厳密に言えば述部文末一につくこと、文レベルで「は」と「が」の相違があることや実際に無主題文が多く現れていること、などに対して、それらが〔主―述〕構造とどのように関わっているのかなど、言語学上の一般則にも日本語文の特殊性にも有効な総合的説明を展開させていくことが必要だと考える。

### 1. 3. 〔主―述〕構造を骨格とする言語表現の特徴—文レベルを中心に

一般言語学で定義する〔主―述〕構造は言語表現において、表現内容を「二つの部分に分けて結び付けて述べる」ことを意味するものである。具体的に日本語文になると、構造的には文レベルのものと文以下レベルのものとの二つがあり、文レベルにおいては、〔主語が―述語〕と〔主題は―述題〕という二つの構文式に分かれていて、機能上の対立をなして様々な意味を表すことになり、文以下レベルになれば、〔主―述〕構造によって形作られたまとまった内容が連体修飾節や複文の従属節に現れていることになる。<sup>9</sup> その意味で、〔主―述〕構造は言語による表出内容構成の基本的な構成法となり、それが文レベルにおいても文以下レベルにおいても基本的に同じである。両者の違いは、文はコミュニケーションの基本的単位になり、その結びつきは話し手の心的態度を表すモダリティがついているのに対して、文以下レベルでは、文を作り出す構成部分の一部にすぎないというところにある。

また、文は「文の実質的内容」と「モダリティ」から構成されるもので、「主」と「述」を取り結ぶことは文形成上話し手が最初に行う主体作用であるとするれば、「命題」は文全体が示す表出内容を含めるものだと見ることが妥当であろう。また、日本語文では、形態的に「モダリティ」を表す言語形式は文末につくので、〔主―述〕結合という角度から見れば、〔主部〕に対する〔述部〕内容を特徴付けるものとなり、述部中心に考えると「包み・包まれ」関係を構成するものであっても、文レベルにおける第一段階の構造は〔主―述〕を結び付ける並列的な結合関係をしていることになり、両者が一体になって文内容を表現していくものと見るべきではないかと考える。言い換えれば、もし「命題」と「モダリティ」を「述部内容」内に定義限定して、文レベルの〔主―述〕構造を除外してしまったら、それが文レベルの議論ではなく、文以下レベルの議論—正確に言えば〔述部内容〕をいかに形成していくか—になり、そうすれば、文は「命題」と「モダリティ」から構成されるという定義そのものも成り立ちにくくなるのであろう。

<sup>9</sup> 複文構造については、橋本進吉氏は〔従属節―主節〕のように解釈している。それは〔主―述〕構造と研究対象が違うものの、「二つに分けて一まとまりに結び付ける」構造においては基本的に同じであると思う。

このように、[主一述] が言語表現において表出内容を作り出すという一般言語学理論に従いながら、日本語の文レベルにおいては、[主題は一述題] と [主語が一述語] 両者が基本的な構文式として使われており、それぞれが機能の対立をなして異なる意味を表しているということができよう。本研究では、文レベルの [主一述] 構造は文の表出内容を作り出す骨格をなすもので、話し手が表出内容をまず [主部] と [述部] に分けた上で、それを結び付けて自分の言いたいことを表していく。そのような結合には、すでに話し手の基本的な主体的作用が働いていると考え、ここで、それを第一段階のモダリティと名づける。それから、日本語文では形態的に「述部内容」を表す言語形式につく「モダリティ」を、意味機能に応じて「対事的」と「対人的」の二段階に分けて、それぞれが「述部内容」を特徴付けた上で「主部」と結び付けて文の表出内容を表していくものと見たい。第一段階のモダリティは文レベルで [主一述] を結びつける心的作用であるのに対して、第二と第三段階のモダリティは「述部内容」に対する話し手の認定と、「話し手の認定を含めた述語内容」を、話し手が聞き手に対して提示する気持ちを表すものと、階層の異なる心的作用を表すものとする。

以下は、文レベルにおける [主一述] 構造の結合と、[述部内容・対事的モダリティ/対人的モダリティ] の融合という角度から、日本語文の言語構造と意味機能の特徴を明らかにしてみたい。<sup>10</sup> 具体的には、まず日本語文に見られる二重 [主一述] 構造である [主題は一述題] と [主語が一述語] の意味表出の機能対立特徴を、例を挙げながら分析する。それから、日本語文構成に見られるモダリティの相違を三段階に階層化し、[主一述] を結びつける表出作用を第一段階とし、述部内容につくものに対して「対事的」を第二段階と、「対人的」を第三段階と分けた上で、それぞれが「述部内容」をいかに特徴付けるのかを、モダリティの機能と特徴の角度から説明を試みる。そして、最後には [主一述] 構造と情報伝達の [既知—未知] 理論は密接に関係することから、日本語文構造を例にして両者のインターアクションについて少し私見をのべてみたい。

## 2、日本語文構造に見られるモダリティの階層性—モダリティ三段階について

日本語の文レベルにおいては、[主一述] という基本的構造に従って表出内容を形作っていくのであるが、話し手が表出内容を [主部] と [述部] に分ける時に、二重 [主一述] 構造である [主題は一述題] と [主語が一述語] をとっており、異なった表出機能をそれぞれが表している。また、コミュニケーションにおいて、[主一述] 構造によって形作られた文内容は、話し手の認定などを表したり、聞き手にそれを差し出したりするのだから、「対事的モダリティ」と「対人的モダリティ」を備えることになる。日本語文では、認定という「対事的モダリティ」も提示という「対人的モダリティ」も、文構造の上では「述部内容」の文末に付き、機能的に「述部内容」を特徴付ける意味を表すことになるので、どんな性質の「述部内容」で

<sup>10</sup> ここで、文レベルの [主一述] 構造を「結合」と、述部内容に見られる [述部内容・モダリティ] 構造を「融合」と、呼び分けることにする。結合とは、対等の関係で結び付ける構造のことを意味し、融合とは、両者が内容的に溶け合って一つの構造物を作り出すことを意味する。

〔主題は〕または〔主語が〕と結びつけるのかという結合法として解釈したほうがよからう。

ここで、南不二男氏の「対事的モダリティ」と「対人的モダリティ」を使っているが、用い方は南氏のそれとは異なる。南氏（1974、1993）では、日本語文構造を ABCD の四段階に分け、主語がない文内容の A 段階と、〔主語―述語〕構造を持つ文内容の B 段階はモダリティなしと扱われている。そして、事態めあてのモダリティがつく述部内容を C 段階に、聞き手めあてのモダリティがつく述部内容を D 段階に分類しているが、構造的に事態めあてのモダリティも聞き手めあてのモダリティも、AB 段階の文内容を包みこむ形で関係していると理解する。A と B 段階の相違については独立した「主語」の有り無し以外には触れていない。つまり、本研究で主張する〔主―述〕構造の第一段階モダリティ性と根本的に異なるのである。

以下は第一段階〔主題は―述題〕と〔主語が―述語〕によって表される話し手の「表出モダリティ」、第二段階〔述部内容+話し手の認定モダリティ〕、第三段階〔述部内容+話し手の認定モダリティ〕+話し手の提示モダリティ〕という順に分析検討していきたい。

## 2. 1. 日本語文の特殊性―〔主題は―述題〕と〔主語が―述語〕の二重構造

日本語では、文レベルにおいて〔主―述〕に基づく〔主題は―述題〕と〔主語が―述語〕の二重〔主―述〕構造システムを特殊性とする。それが構文的に〔主題は〕と〔述題〕の結び付け方や〔主語が〕と〔述語〕の結び付け方が異なるという結び付け方の相違を表すと同時に、文レベルにおいて異なる意味表出機能を示している。ここでは、〔主題は―述題〕を「主題解説型」構文式と、〔主語が―述語〕を「主語照合型」「事態表出型」構文式と分類して、構文上の結び付け方と意味表出機能の関係について分析していきたい。

### 2. 1. 1. 〔主題は―述題〕と〔主語が―述語〕の意味表出機能の相違

文レベルにおける〔主題は―述題〕と〔主語が―述語〕の意味表出機能の相違については、これまですでに多くの研究成果がある。構文的には〔主題は―述題〕を「主題解説型」と、〔主語が―述語〕を「主語照合型」「事態表出型」に類別することができよう。

〔主題は―述題〕構文式の意味表出機能

④私は朝日大学経営学部の三年生です。 「主題解説型」（有題文）

⑤（今日は）雨が降ったり止んだりして天気が非常に不安定です。（主題省略文）

〔主語が―述語〕構文式の意味表出機能

⑥雨がしとしとと降り続けている。 「事態表出型」

⑦それがほかでもなく私の長年欲しがっていたものです。 「主語照合型」

これまでの構文研究で「無題文」という言い方があるが、文レベルにおいて、〔主―述〕構造を文の骨格を作り出すものと見るならば、主題省略文があっても無題文がないというふうを考える。つまり、〔主語が―述語〕構造が文以下レベルになる場合は、「主題省略文」になるが、

文レベルの「主語が—述語」構文式はそもそも「主題は—述題」構文式と対立しているものである。<sup>11</sup>

また、構文式といっても、「述部内容」として動詞文・形容詞文・名詞文という語彙区別があり、文末に「～テイル形・タ形・受身形・使役形」など「ヴォイス・アスペクト・テンス」による変化形がつくように述語の形態変化もある。それは意味伝達の「既知—未知」理論と絡んで「主題は—述題」と「主語が—述語」の使い分けに影響を与えることになる。<sup>12</sup>

⑧2020年のオリンピック「〇は／？が」、日本の東京で行われる。

⑨「〇～は／？～が」、友達に食事代だけでなくタクシー代まで払ってもらった。

このように、日本語文章では、文と文との組み合わせにおいて「主題は—述題」と「主語が—述語」が様々な意味を表す文を作り出し、それらが交替に使われることによって段落構成をし、文章を作り出していくのである。

## 2. 2. 「述部内容」を特徴付ける第二・第三段階のモダリティ使用

日本語文では、構文的に「対事的モダリティ」も「対人的モダリティ」も「述部内容」の文末につくという特徴がある。しかし、「対人的モダリティ」を示す言語形式は「対事的モダリティ」を示す言語形式の外側に置かれるという順序の決まりがあつて、「述部内容」に限って言えば、「モダリティ」が「述部の実質的内容」を包み込む形で作り出されてそれを特徴付けることになる。しかし、表現的にはモダリティ形式の「有標」と「無標」の問題もあり、文が完結した場合、機能的にはあつても形態的には「無標」になることもある。従つて、「対事的」とは、話し手の認知作用を表す「述部内容」であるが、語用的に、それだけで聞き手に提示するモダリティ機能を持たせられることがあつても、言語形式自体が提示という機能は持ち合わせていない。それに対して、「対人的モダリティ」を明確に示す言語形式が付く「述部内容」はすでに話し手がどんな形で聞き手に提示し、聞き手にどんな反応を期待しているのかを明示しているので、表現的には「有標」表現になっている。

次は「述部内容+対事的モダリティ」と「{述部内容+対事的モダリティ} +対人的モダリティ」という二つの融合体に分けて、実例を挙げながら説明していきたい。

<sup>11</sup> 「主題省略文」は語用研究の内容になるので、ここでは触れないことにする。また、文レベルの「主語省略文」がありえないのは、「主語が—述語」構文式が果す意味機能に関係がある。

<sup>12</sup> 「主語抹殺論」に対して「主語優位論」という主張があり、代表的なのは柴谷方良氏の一連の議論がある。例えば、「主語は尊敬語化現象及び再帰代名詞化現象を誘発するという統語的機能を持っていると特徴付けることができる」など（『日本語の分析』pp. 184—185）。しかし、本研究のように文レベルにおいて「主—述」構造が骨格をなすものであると認めるのなら、すでに優位の問題ではなくなる。従つて、基本語順として「が」成分が文頭に置かれやすいことや、主語が尊敬語化を引き起こすなど、日本語の言語使用実情に対する指摘は、「主題は—述題」か「主語が—述語」かを結び付ける時に起きる言語現象と解釈し直すこともでき、表現特徴によってどちらの構文式が選択されやすいかと解釈されてよからう。



一番大事なのは、[相手のことを思う心だから]。

### 3、文レベルの [主—述] 構造と情報伝達上の [既知—未知] のインターアクション

情報伝達の一般則に従えば、情報には [既知] 情報と [未知] 情報との二つの部分があり、話し手が [既知] 情報を元にして [未知] 情報を付け出していくという形で話を進めていくことが多い。確かにコミュニケーションにおいて意味的に見れば [既知→未知] という形が最も普遍的に使われるものと言えよう。しかし、[既知—未知] の組み合わせ方から見れば、理論的には少なくとも四つの意味伝達のパターンが成り立つ。

A) [既知→未知] B) [既知→既知] C) [未知→既知] D) [未知→未知]

上記のような情報伝達の [既知—未知] パターンは必ずしも文の構造と一致して行われるものとは限らないが、ここでは、文を中心にして言語構造の角度から両者のインターアクションについて分析してみたい。

#### 3. 1. [主題は—述題] [主語が—述語] と [既知—未知] のインターアクション

上で述べた四つのパターンに対して、日本語の例文を挙げてみる。

A) [既知→未知]

⑱ 今度の朝日大学祭は大成功でした。

B) [既知→既知]

⑲ 親は／も親で、子は／も子だよ。

C) [未知→既知]

⑳ 誰が空港まで出迎えに来るかな。

D) [未知→未知]

㉑ 雨が降り出した。

B) の [既知→既知] パターンによる [主題は—述題] 構文式は、「主部」と「述部」が一体となって特殊な意味を表す用法である。それを除いて、A) C) D) はまさに [主題は—述題] と [主語が—述語] の機能対立によって表し分けられる文タイプで、それが文レベルにおいて情報学と言語学は意味伝達と形式構造とは重点が違うものの、両者が究極のところ一致するものでなければならないことを示していると思う。

### 4、本研究のまとめとこれからの展望

本研究では、まず一般言語学理論に従って、人間の能動的な認知作用は [主部] と [述部] を結び付けることから始まることを確認した上で、それを文レベルと文以下レベルに明確に分けることが必要だと述べた。そして、コミュニケーションの基本的単位である文は構造的な完結性と、意味機能的な一まとまり性によって保障されることを紹介し、それは文レベルにおい

て、その完結性は構造的に〔主部〕と〔述部〕から構成されるということの意味し、一まとまり性は〔主部内容〕と〔モダリティを帯びた述部内容〕を結合することによって形作られるということになると説明した。

それから、日本語文を例にして一般言語学理論と日本語の特殊性を取り上げて分析してみた。日本語文では、文レベルにおいて〔主題は―述題〕と〔主語が―述語〕の異なる構文式が機能対立して構文上の意味表出を分担しており、〔述部〕の文末に付くモダリティは「対事的」と「対人的」に特徴付けられて〔述部内容〕を作り出し、そして〔主部内容〕と結合して文を形作っていくことになる。それは言語表現の一般則と日本語表現の特殊性が総合的に表れるもので、これまで多く議論された日本語表現の特徴は何らかの形でこの二つに関係していると指摘した。

さらに、本研究では、上記の認識に基づき、日本語文の〔述部内容〕を特徴付けるモダリティとして主に〔対事的〕と名づけられる「認知作用類」と〔対人的〕と名づけられる「提示作用類」があると指摘し、それが「述部の実質的内容」と「モダリティ」の融合によって形成されるもので、「述部内容」の分類に関わってくると主張する。<sup>14</sup>そこで、日本語文形成に関わるモダリティとして三段階のものがあるとし、第一段階の「表出作用」は〔主部〕と〔述部〕を結び付けることで、結合体としての文の骨格を作り出し、第二段階の「認知作用」と第三段階の「提示作用」はいずれも「対事的」か「対人的」かのように「述部内容」を特徴付ける融合体を作り出すと分類する。

最後に、情報伝達の構造パターンと言語表現にある文構造の言語表出形式を取り上げて、両者の意味表出において現れるインターアクションについて私見を述べてみた。日本語文の〔主題は―述題〕と〔主語が―述語〕の二重〔主―述〕構文式はまさに情報伝達の法則を構文論の角度から支えているものとなり、情報伝達の一般則と言語形式の特殊性は文レベルにおいて作用し合う形で見事に一致することになると見ている。

言語形式と意味機能の関係は言葉研究の中心課題であり、一般則と特殊性という総合的視点によってはじめて明らかにすることができるものが多い。これからも一般則に関する理論をより厳格に見極め、一方、日本語表現に関する特殊性をさらに幅広く集め、比較研究の視野から再検討して日本語文の表現特徴を解明していきたい。また、第二段階と第三段階の「モダリティ」によって「述部内容」が特徴付けられると言っているが、具体的にどのような特徴付けられ、それがそれぞれ〔主題は―述題〕構文式か〔主語が―述語〕構文式かの選択にどのような関わるのかについても、実例に基づいた詳しい分析が必要と思う。さらに複文において〔従属節―主節〕構造が結合体であるとして、その意味機能を説明するほうがいいと思うが、それが文レベルで〔主―述〕構造とどのような形で作用しあっているのかも重要な問題になろう。いずれも今後の課題にしたい。

<sup>14</sup> 「認知作用類」で文が終わっているが、「認知モダリティ」を開き手へ提示する文がある。それは語用的には「無標の提示モダリティ」と見てよいと思う。「有標」と「無標」の表現的相違については、次回に譲ることとする。

**参考文献**

- 奥田靖雄. 語彙的なものと文法的なもの. [J] ことばの研究・序説. むぎ書房. 1985
- 奥田靖雄. 文のこと. [J] ことばの研究・序説. むぎ書房. 1985
- 尾上圭介. 文法と意味 I. [M] くろしお出版. 2001
- 柴谷方良. 日本語の分析. [M] 大修館書店. 1978
- 鈴木重行. 主語論をめぐって. [J] むぎ書房. 1992
- 時枝誠記. 日本文法文語編. [M] 岩波書店. 1954
- 日本語文法学会編. 日本語文法事典. [M] 大修館書店. 2014
- 野田尚史. 主語と主題. 日本の言語学・30年の歩みと今世紀の展望. 『言語30周年記念別冊』. 大修館書店. 2002
- 橋本進吉. 国文法体系論. [M] 岩波書店. 1959
- 三上章. 日本語の論理. [M] くろしお出版. 1963
- 南不二雄. 現代日本語の構造. [M] 大修館書店. 1974
- 南不二雄. 現代日本語文法の輪郭. [M] 大修館書店. 1993
- 益岡隆志. 命題の文法. [M] くろしお出版. 1987
- 益岡隆志. モダリティの文法. [M] くろしお出版. 1991
- 渡辺学. 形式名詞と格助詞との相関 単文と複文をめぐって. [J] くろしお出版. 1995
- 譚崢. 日语终助词承接形的结合方式与意义功能的相关性考察. [M] 外语教学与研究出版社. 2015
- 袁毓林. 汉语动词的配价研究. [M] 江西教育出版社. 1998
- 于日平. 关于“から”的功能转变—表示理由的接续助词用法和表示说话人语气的终助词用法一. [J] 日语学习与研究5. 2001
- 于日平. 接续助词的连接方式和词义特征. [J] 日语学习与研究2. 2016
- 周士宏. 汉语句子的信息结构研究. [M] 北京师范大学出版社. 2016

作者信息：北京外国语大学日语系教授研究专业：日语语言学和中日对比研究

联络方式：13520548228@163.com

*Author' Information*

*Yu Riping(Male) Year of Birth : 1954*

*Professor at Beijing Foreign Studies University*

*Japanese linguistics Study, Comparative Study between Chinese and Japanes*

*E-mail ; 13520548228@163.com*